

新刊紹介

大石茜著

『近代家族の誕生—女性の慈善事業の先駆,「二葉幼稚園」』

四六判 / 272 頁 / 定価 2,900 円 + 税 / 藤原書店, 2020 年

和田 真由美

姫路大学教育学部講師

本書は、「近代家族の誕生」というテーマにおいて教育機関として始まり、後に保育園と変容していく「二葉幼稚園」をフォーカスし、慈善事業の視点から丁寧に読み解いた意欲作である。「近代家族とは」という問いに一石を投じている。

本書の目的は、「明治末・大正期の都市下層の家族と、そこに介入していった慈善事業から近代家族の成立を捉え直す」(7頁)ことである。

本書は、Ⅱ部構成の4章立てとなっている。

第Ⅰ部「天皇制とキリスト教—女性による慈善事業の背景—」の第1章「慈善事業を支えた天皇制とキリスト教」では、1900(明治33)年に、野口幽香、森島峰が「二葉幼稚園」を設立する経緯と、その運営方法が示される。二葉幼稚園は、教会を通して繋がる賛同者からの寄付により運営を始めていたが、1909(明治42)年からは毎年国家の助成金を受けられるようになった。天皇・皇后からの下賜金、御料地の拝借などの恩恵も受けており、いわゆる天皇制慈恵主義と呼ばれる政府の救貧行政の元で発展したと述べている。

第2章「女性による慈善事業の実現」では、慈善事業の担い手が男性中心であった実態を詳細なデータに基づき示し、二葉幼稚園が女性によって創設・運営されたことの珍しさと、創設者の野口幽香、森島峰、後に二葉幼稚園の園長として運営を引き継いだ徳永恕の生い立ちが述べられる。また、良妻賢母教育が盛んな時代において、保姆の

資格を持つ高学歴のクリスチャンであった野口、森島、徳永が、社会に出て働き続けられた背景に、皇后及び、皇室の女性たちの行啓との関連があげられている。皇后の行啓は、上流階級の女性に積極的に受けとめられ、「こうした人々が二葉幼稚園へ積極的に寄附し、事業を支えていた」(96頁)と、二葉幼稚園が多くの女性により支えられていたことが示される。

第Ⅱ部「都市下層の近代家族化—新たな協働性の創造」では、二葉幼稚園が、「国家による主体化=服従化」(100頁)ではなく、「既存の力を利用しながら、社会の変化が生み出されている側面」(同上)を持っていたと展開し、二葉幼稚園の年報を紐解きながら、都市部の下層家庭を「近代家族」へ教育していく実際を明らかにしている。

第3章「『貧民』へのまなざしの変化—蔑視から共感へ」では、貧困と差別に満ちた貧民地域において、「子どもがそのような環境で毎日を過ごすことを問題視」(119頁)することから出発した二葉幼稚園の関係者のまなざしが、子どもとの関わりの中で、同情から共感へと変化する過程が丁寧に描かれている。その同情は、親に対しても向けられるようになり、特に母親に対する思い入れが深まり、母子寮(現:母子生活支援施設)である「母の家」が創られたことや、「女性による、母子の救済という連帯」(136頁)が生み出されたことが述べられている。

第4章「二葉幼稚園と近代家族の形成」では、二葉幼稚園の教育や家庭への支援により変化していく都市下層の家族の実態を詳細に示しながら、新しい家族の形態を形成していく過程と、二葉幼稚園が社交の場となり、共同性が新たに構築されていく過程が明らかにされている。

母親も働かざるを得ない人々は、「生き抜くための手段として」(164頁)、1日1銭で子どもを教育し、おやつを提供してくれる二葉幼稚園に子どもを預けるようになる。

教育機関である二葉幼稚園は、子どもの教育に留まらず、家族が困窮生活から抜け出せるように、家庭訪問や親の会を開き、教育の重要性を説くとともに、まじめに働いて貯金することを奨励した。そして、家庭の経済基盤を安定させることによって新しい近代家族の成立を図ったと解く。

本書の意義は、「二葉幼稚園」が国家に無条件に動員されるのではなく、キリスト教慈善事業や家庭教育というノウハウを駆使して、保育という事業を通して都市下層に暮らす人々の新たな家族を形成していく過程を示したことにある。これらの実証により、本書の元となった『『近代的家族』の誕生—二葉幼稚園の事例から』で、第10回河

上肇賞本賞を受賞した。

キーワードとなる「近代家族」をめぐる議論は、社会史や社会学等の研究において活発にされてきた。本書では、第4章において落合恵美子(1989)が近代家族を特徴づける指標としてあげた8項目を示したうえで、近代家族の大きな特徴として「心性の特徴に注目する」(139頁)とし、「子どもを中心とする愛情深い家族、という心性の変化」(同上)を分析の視点として示す。そして、「家族という形態の維持できなかった人々が、家族という単位で生活を営めるようになる、という変化」(142頁)を二葉幼稚園の保姆の記録から読み取り、家族の小規模化と子どもを中心とした情緒的結びつきをどのように形成していったかを述べている。毎日仕事に追われ、生きるのに精いっぱいであった家庭において、親子の情緒的結びつきがどの程度のもので、子どもの教育に関する関心がどこまであったかという点においては多少の疑問も残る。しかしながら、二葉幼稚園が、あらゆる手立てを駆使して、都市下層の人々を近代家族へと導いていく過程に着目した著者の視点は鋭く、興味深いものであった。今後も、様々な近代家族を形成する要因を追求されていくことであろう。